

中国雲南省、北ベトナム取材記 2007年

弊社は、毎年海外での現地取材を敢行し、その成果を教科書・副教材作りに活かしてきました。今年は8月6日～15日の10日間、中国の雲南省と北ベトナムで生活・文化・歴史について取材してまいりました。ここでは、特に印象深かった取材先での一コマをご紹介します。

豊かな自然と文化に恵まれた雲南省

1. 石林へ

雲南省の昆明市より南東に向かうこと約80km。私たちは、カルスト地形で知られる石林風景区へと向かった。かつては一般道で半日かかったそうだが、今は高速道路が完成したため、実に快適なドライブである。昆明の中心部を抜けると、途中の山々にはトウモロコシが多く栽培されている。トウモロコシは、大航海時代以降に新大陸からもたらされた栽培植物だから、今私たちが見ている風景は、ここ数百年ほどで大きな変貌を遂げたはずである。ユーカリも近年になって植林されるようになったとのことである。成長が早いため土壌流出の防止に役立ち、副産物として油が採れるためらしい。開発と保全をめぐる問題や人と自然の関係の歴史に思いをはせる道中であった。



石林のようす (昆明市石林イ族自治県)

さて、石林である。この石林は、約 2 億 7 千万年前に海底が隆起し、その後、侵食・風化が進み、現在のような風景に至ったそうである。海底だった証拠に、現地の少数民族であるイ族が、土産に三葉虫の化石を売っていた。この風景区は面積が 350 平方 km もあり、その至るところに写真のようなカルスト地形が見られる。「石林」は知識としては知っていたが、石柱の高さが 20~30m もあり、まさに圧巻の一言であった。ちなみにこの風景区が観光地化されたのは 1982 年で、当時の見学料は 5 角(1 元 = 10 角)。現在は 140 元(1 元 = 16 円)であるため、観光資源の開発・景観保全に力を入れていることも感じられた。実際、今後さらなる風景区の整備が計画されていると聞いた。

2. 聖なる山 玉竜雪山から世界遺産 麗江旧市街へ



玉竜雪山 (麗江ナシ族自治県)

昆明より約 1 時間のフライトで麗江へ。麗江の中心部より 20km 足らずの場所に玉竜雪山はある。長さ 35km、幅 25km、13 もの峰を有し、最高峰は 5,596m に達する。登山隊が挑戦すること 17 回を数えるが、未踏破。ここは北半球における氷河の南限である。現地のナシ族によって崇められる聖なる山。私たちは幸いにも、この玉竜雪山を写真に収めることができた。というのは、この地域はモンスーンの影響を受け、8 月は雨季にあたっているからである(雨季は 5 月中旬~9 月まで)。頂に近づくにつれて変化する植生の様子や、氷河までも観察することができた。しかし残念なことに、現在では地球温暖化による氷河の融解が懸念されているという。「未踏破」の峰にも人間の影響は及んでいるのである。雄大な

眺めとの別れを惜しみつつ、麗江の中心部へと向かう。途中、玉竜雪山周辺の村から来たと思われる隊商とすれ違う。馬の背に商品を積み、おそらくは私たち同様、麗江へ向かうのであろう。いにしへの茶馬古道でも同じような光景が見られたに違いない。茶馬古道とは、ここ麗江、さらに大理を経てチベット・インド方面へと至る交易路である。雲南方面からは名産の茶や塩が、チベット・インド方面からは牛・馬・羊とその毛皮などがもたらされていた。



麗江旧市街のようす

麗江旧市街に到着する。ここは海拔 2400m。少しでも走ると息切れがする。最近では日本人アスリートも高地トレーニングに訪れるそうだ。旧市街には美しい町並みが広がり、1997年に世界文化遺産に登録された。写真に見られるように、街には石畳が敷かれ、低地には至るところに水路が張りめぐらされおり、涼を誘う。道の両側には様々な土産物を守る商店や飲食店が並んでおり、賑やかである。どこか日本の門前町を思わせる佇まいである。



獅子山公園より「木府」をのぞむ

旧市街は、獅子山公園から一望できる(入園料は 15 元)。公園からの眺望は見事なものである。眼下に一面、灰色の屋根をもつ家並みが広がる。その中に一つ、黒い屋根、白壁・朱塗りの壁をもつ建物がある。これが「木府」である。つまりナシ族の木氏の土司府である。元の時代以降、辺境支配のために在地の指導者を官職に任命したが、これを「土司」と言う。

麗江は中国で唯一城壁をもたない街として知られるが、これは、木氏の「木」を「口」で囲むと「困」に通ずるためとガイドは説明する。が、これはいささか出来すぎた感じがしなくもない。観光地化が進んだためにできた小話かもしれない。ナシ族はチベット系(歴史上、羌族として知られる)ゆえ、城壁がないのは民族性の違いなのかもしれない。

麗江は中国で唯一城壁をもたない

3.元陽の棚田



山腹全体に広がる棚田 (元陽県勝村近郊)

再び昆明へ戻り、バスで半日以上かけて南下し元陽へ。翌朝、朝早くに棚田へ向かう。2か所で棚田を撮影したが、麓より山頂まで広がる棚田は、あまりにも広大なことと、朝靄が立ち込めていたこともあり、うまく写真に収められなかった。とにかくその雄大さと、このような高地のしかも傾斜地での人々の営みのすごさに、ただただ圧倒されるばかりであった。その迫力は見たものでなければわかるまい。ガイドの話では、棚田を撮るのは通常、冬季であるという。冬季は、棚田の田一つ一つが鏡のように反射するため、その様子が大変美しいそうである。ところで、写真を見るとわかるように、山腹には所々に家屋とそれを囲む樹木が見えるが、これは農繁期に住むための仮屋であるという。またこの写真では見えないが、田に十字の溝のようなものが見えることがある。ガイドの話ではそこで泥鰌などの魚を養殖しているのだという。広大な棚田を維持・管理していく上での人々の知恵を感じた。なお、途中立ち寄った八二族の村の人の話では、棚田で栽培される稲は、改良種であるとのことだった。

少数民族の伝統・植民地時代の遺産・開発が進む首都ハノイ ～多様性の中で成長を続けるベトナム～

1. ベトナムの避暑地サパへ



フランス人観光客に土産物を売る少数民族の少女たち (サパ)

中越国境の都市 河口から国境を越えてラオカイへ、さらに高原の地サパへ。高地だけに、気温が30 近い低地のラオカイに比べて 20 前後と冷涼で、快適そのものである。ここは、もともと植民地時代にフランス人が避暑地として開発した街だ。そうした歴史的背景からかフランス人観光客の姿が多い。キリスト教教会もあるくらいだ。もちろんベトナム人、中国人、日本人も多く訪れている。



手に土産物をもつ少数民族の少女 (サパ)

市場には、観光客目当ての土産物売りがたくさん集まっている。ザオ族やモン族など少数民族の人たちだ。彼女らは(彼女らというのは、売り子のほとんどが女性だからだ)、色彩豊かな民族衣装や反物、刺繍を施した小物(財布や携帯入れ)、焼き栗、果物、日用雑貨、おもちゃなど、ありとあらゆるものを売っている。年配の女性から、写真に見られるような小さな女の子まで、売り子になって土産物を勧める。彼女らは貧しくとも、子どもの頃から自立する術を身につけているのだ。そういえば、坂の上で飲み物を売っている男の子もいた。小さな兄弟姉妹のめんどろを見ている子どももいた。自立する姿や助けあう姿、こうしたことは、今の日本人に必要なことなのではないか、と思いつつサパを後にした。

2. ラオカイよりハノイへ



ラオカイ発の寝台急行 (ハノイ)

保にあてている)、停車中はお手洗いが使えない、1つのコンパートメントは2段式×2セットゆえベッドで4人が寝られるが2階席になるとスコールや雷の音で目が覚める、到着して降車が遅いと車内の電気を消されるなど、快適とは言いかねる面もあったが、それもまた寝台列車でなければ味わえない旅情というものであろう。それでも以前に比べると、快適性は随分改善されたようだ。重い荷物を背負ったフランス人と見られるバックパッカーの姿も多く見られた。

再び蒸し暑い低地へと戻り、寝台急行でハノイへ。この鉄道は植民地時代にフランス人が敷設したものである。ベトナム方面より雲南方面へと進出するために敷設したのだが、進出の目的は、雲南の豊かな鉱産資源を獲得するためであった。この鉄道もまた、サパ同様、「帝国主義」の歴史的産物なのである。この鉄道についての感想だが、メーターゲージと呼ばれる狭軌ゆえに通路が狭い(その分、寝台のスペース確保

3. ハノイにて



ホーチミン廟 (ハノイ)

ハノイでは、まずホーチミン廟を見学した。夏休みのしかも日曜日とあって、親子連れが多く、大変な人ごみ。しかも列に割り込む人が多いのには閉口した。軍人や役人が列を監視しているにもかかわらず、である。しかしそれが逆に、ベトナムの人たちとの国民性の違いや、あるいはホーチミンに対する想いの強さを感じさせる。1時間半待って、ようやくご対面。眠ったように横たわるホーチミンは、かつて同じ場所で独立宣言を行ったときと同様、ベトナムを守り続ける「国父」としての威厳を、死してなお感じさせた。

その後、歴史博物館、民族学博物館を見学。それぞれ充実した展示がなされていたが、印象に残った展示を一つ。民族学博物館ではドイモイ以前と以後とで人々の生活がどのように変化したのか、という企画展が開催中であった。ドイモイ以前は配給制で、物が不足しており、闇市(black market)がたっていたこと、家は狭く、家電製品も少なかったこと、既製のおもちゃは手に入らず、子どもたちは手作りのおもちゃで遊んでいたことなどが、当時を振り返る人々の声を記したパネルとともに示されていた。特に金属製の環で卵を固定してある展示、そこに *meat with egg is a small proud* という一行だけの解説を付した展示は、当時の様子を何よりも雄弁に物語っているように感じた。ドイモイ以後は、この状況は改善されつつあるようである。むろん国内の所得格差など問題が山積みだが、以前のような極端な物不足には困っていないようである。

ハノイ大学ではわずかの時間だが、日本学科の大学生たちとの交流も行った。学生は男性もいたが大半が女性であった。彼女たちは、日本の音楽やマンガを良く知っており、日本語をカラオケでも「学んでいる」そうである。こうしたところはいかにも現代っ子らしい。皆、高学歴ではあるが、ベトナム戦争やベトちゃん・ドクちゃんの話をしてピンとこない様子だったのは意外だった。日本でもアメリカと戦争をしたことを知らない学生が増えていると報道されることがあるが、彼我の地で歴史教育において同じ問題が起きている。そういえば、ベトナムでも受験競争が激化したり、インターネットやテレビゲーム、日本の SMAP やちびまる子ちゃんに夢中になったりしていることが話題になっているという。確かにベトナムは経済的には豊かになってきている。しかしそれが、先進国に共通する悩みを生み出している。そんなことを感じた。

取材を終えて

誌面の都合で紹介しきれませんでした。雲南では麗江博物院でトンパ文化を見学し、ハノイでは市内に残る様々な遺跡群や水上人形劇を見学しました。一日だけでしたが広州では鎮海楼や西漢南越王墓博物館を見学しました。それらの写真はこのホームページ上に掲載しています。

この取材を通して感じたことは、両国(中国の場合は雲南・広州のみで、ベトナムはハノイとその周辺のみなので、地域と言うべきでしょうか)とも、人々がエネルギーに満ち溢れていたということです。若者や子どもが多いためかもしれませんが、人々が皆、生き生きとくらしている、そんな雰囲気にあふれていたということです。むろん、わずか10日間の

しかも限られた場所での印象ですから、一面的な感想かもしれません。しかし、時間に追われ、いつも疲れたような今のわれわれ日本人の姿を見ていると、21世紀の世界とアジアを牽引していくのは、このようなアジアの隣人かもしれない、そのようなことを感じつつ帰国の途につきました。

(Y . N)